様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ１３８０４

研究課題名（和文）同族企業の維持・終焉と信頼の関係：医薬品の取引システムとその変容を通じた考察

研究課題名（英文）The Relationship Between the Preservation and Demise of Family Firms and Trust: A Study through the Pharmaceuticals Trading System and Its Transformation

研究代表者
藤野　義和（Fujino, Yoshikazu）

信州大学・学術研究院社会科学系・准教授

研究者番号：１０７８１４０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、医薬品業をリサーチターゲットに定め、取引に内包されると考える信頼に着目し、同概念と企業統治の変化の関係を考察した。計画では医薬品業及び医薬品卸のインタビュー調査、更に公刊資料をもとにテキストマイニングを実施するとしたが、コロナ感染症の影響もありインタビュー調査が予定通り進まなかった。そのため医薬品取引の変化と関連する卸業の変化を厚く分析した。
結果、わが国固有の取引システムを表す系列化やテリトリー制が形骸化した事に加え、同時期に卸の統治構造の変化も見られた。このような取引システムの変化と医薬品業と卸の同時期に似通った統治構造の変化の連関は、信頼の意味変化と関連すると推察された

研究成果の学術的意義や社会的意義
わが国の株式会社の多くは同族企業であると言われている。そのような同族企業を対象とした研究は数多い。しかしながら、株式が分散してもなお同族が経営に関与し続けることが可能な理由については明らかにされていない。この研究を追求することにより企業統治論の新たな切り口につながる。本研究ではそこに辿り着けなかったものの、本研究の成果によりそれが前進した。
また経験的には言われてきたものの、わが国の医薬品取引の仕組みを表すテリトリー制や系列化がどのように終焉したのかを明らかにした。これも意義ある結果と捉えている。

研究成果の概要（英文）：In this study, the pharmaceutical industry was selected as the research target. Focusing on trust, which is considered to be inherent in business transactions, the relationship between this concept and changes in corporate governance was examined. The plan was to conduct an interview survey with the pharmaceutical industry and wholesalers, as well as text mining based on publicly available materials, but the interview survey did not proceed as planned for reasons including the COVID-19 pandemic. Therefore, a deep analysis of changes in the pharmaceuticals business and related changes in the wholesale business was conducted. As a result, in addition to the loss of substance of the “affiliation” and “territory system” that represent Japan’s unique trading system, at the same time changes were also seen in the governance structure of wholesalers. It can be inferred that the relationship between such a change in the system and governance is related to a shift from individual to trust.

研究分野：経営学

キーワード：同族企業　医薬品産業　信頼　取引システム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、同族企業の経営活動に注目が集まり、様々な実証研究の成果が公表されている。わが国では創業者一族の株式が分散してもなお同族が経営に関与し続ける企業が多い。これは他国ではあまり見られないわが国固有の現象であるが、同族企業を対象とした研究及び既存の企業統治論ではその現象を説明できていない。

本研究では、他産業と比して同族企業が多い医薬品業をリサーチターゲットに定め、医薬品取引に内包されると推察される信頼に着目し、同概念と企業統治の変化の関係を考察する。医薬品取引に着目する理由は、医薬品業においてこれまで続いた同族による経営関与が、取引システムの変化期に終焉する傾向が見られたからである。信頼概念に着目する理由は、医薬品業と卸の関係は競争秩序を保ち利益共同体としての性格があったと考えられており、それは信頼により維持されていたと推察されたからである。

２．研究の目的

研究の目的は、大量保有の株式が分散してもなお、なぜ創業者一族が経営に関与し続けることができるのか、その理由を解くことにある。そこで「取引の変容に伴い信頼の意味が変化し、統治の仕組みが変わり同族関与が終焉した」という仮説を設定し、医薬品業と卸業間の信頼の内容を明らかにし、なぜ過去の変化は同族企業として対応可能で、近年は対応できなかったのかを考察する。

３．研究の方法

（１）当初の計画

当初の計画では、初年度に①「信頼」にかんする既存研究の整理と、②「医薬品の取引システムの変化」という現象の具体化に必要なデータ収集を行う。2 年目に、前年度に開始した経営者の発言等のテキストのデータの収集・整理を引き続き行い、必要なデータが揃えば、③テキスト分析に着手する。また④実務家に対するインタビュー調査にも着手する。3 年目に、卸業に対するインタビュー調査を実施する。加えて④企業統治にかんする文献整理に着手する。そして最終年にこれまでの調査・分析を統合して論文を執筆する予定であった。

しかし、想定外のトラブルが２つあり、上記②と④が完遂できなかった。そのトラブルとは、経営者の言説に関する文献の収集先として「内藤記念くすり博物館」を予定していたが、館内ルールが変更となり、文献の複写が不可能となった。手早く関連箇所を複写し、後日それを読み込み必要なテキストをデータとする予定であったが、複写ができないため、来館内の限られた時間で閲覧し、テキストを ＰＣ に打ち込むという非生産的な作業となった。結果、予定を大幅に下回るデータしか蓄積できなかった。また、コロナウイルス感染症による移動自粛の影響により、予定していたインタビュー調査が難しくなり、ここでも一部調査を遂行するにとどまった。

一方で、医薬品取引の仕組みの特徴たる「系列化」や「テリトリー制」の有無を実証可能なデータが存在することがわかった。そこで次のように計画を修正した。

（２）変更後の計画

拙稿では医薬品の取引システムが変化し、それと連関し卸業の関与方法が変化したと説明しているが、それは経験に基づいた複数の既存研究を引用したものであり、同現象の実証研究が乏しい現状がある。今回収集したデータに基づけば、同現象について実証可能であり、さらには医薬品の卸業を規模や同族関与、さらには医薬品業の株式支配や医薬品取引の状況、そして販売地域といった項目によってグループ化可能となる。加えて、取引の変化期に明らかにしてきた医薬品業のみならず卸業の統治構造の変化をも実証可能と考え、戦略グループの知見を活用し卸業を対象とした分析を実施することにした。

この計画変更は、直接課題解決とはならないが、今後の言説分析に向け、卸業や医薬品業全体での言説の違いというよりは、系列化や同族関与などによるグループ間での言説変化という捉え方が可能になると考える。このような代替分析を実施することにより、今後緻密な言説分析が可能となる。つまり変更の計画は準備的研究と位置付けられる。この準備的研究を経ることで、取引に信頼が内包されており、なおかつそれが医薬品業の統治構造の変化に大きく関係するものであった場合、意味内容の区別がより鮮明になると考えられる。

４．研究成果

今回の研究における成果は大きく三つある。

一つは、わが国の医薬品取引システムの歴史的分析であり、わが国固有の特異な仕組みがいつからどのように形成されたかを明らかにした点である。研究成果 1 では、それを明らかにするとともに、医薬品業の同族企業の終焉と何が関係しているのかを探求している。

明らかになったことは、第二次大戦前と戦中、戦後では大きく異なることである。特に戦後は、医薬品業主導で系列化が加速し、戦前に活躍した仲買、注文屋、セリといった取引の中間プレーヤーが卸業（問屋）に業態を変えるか廃業することになり、プレイヤーの種類と数が大きく減少した。

以降 50 年は、医療用医薬品の市場規模の拡大過程で、品揃え機能、販売（営業）機能、物流機能、リスク負担機能の担い手（三村,2004）、といった役割を卸業が持つようになった。そして先行研究に従えば、医薬品業にとって価値ある卸とは、地域特性や顧客特性を理解し、きめ細かく地域需要を掌握し、地域の医療機関から信頼されることで医薬品業とともに地域市場開拓を進めてくれる卸であった。このように、医薬品業の思惑によって卸に機能が付与されていった。

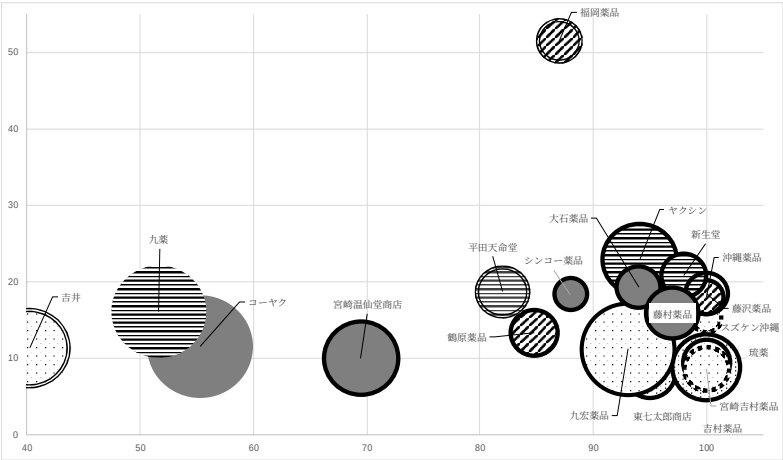

図 1:1990 年の九州地方卸の仕入先と販売地域

一方、わが国において繰り返し政策が変化する過程で合理化が進展し、競争力を持たない卸業が廃業したり、他の卸業に組み込まれたりした。この時期においては、戦後起こったプレイヤーの種類変化はなかったものの、制度変化及び医薬品業の関与方法の変化により卸業の競争の条件が変化した。より規模を大きくし、より広域で販売し、より多様な医薬品を揃える卸業が優位に競争を進めた。二つ目の研究で一部実証したように、中小規模の卸業はその競争ルールの変化の中で大手に組み込まれるか、漸進的な成長しか実現できないようになっていった。前者の場合同族関与が終焉する傾向が見られた。

二つ目は、九州地域に限定した分析ではあるが、1990 年以降の取引の仕組みが変化した際に医薬品卸の同族関与がどのように変化したのかを「系列化」やテリトリー制の根拠となりうる「販売地域」の変化とともに分析した。図 1 は 1990 年のそれらを示したものである。縦軸は仕入先 1 位の医薬品業もしくは同卸業の仕入比率を示し、横軸は 1 位の販売地域の比率を示している。加えて描画する際、卸の特性が理解できるよう次のような加工も行なった。

まず円の大きさにより当該年度の相対的な売上高を示した。ここでは売上が高いほど円が大きくなっている。次に円の模様で仕入先のメーカーの違いを表した。具体的には、灰色が武田薬品（例えばコーヤク）からの仕入が最も多い、横線が三共（例え九薬）、斜線が塩野義（例えば福岡薬品）であり、その他をまとめて水玉模様（例えば九宏薬品）とした。また円の外線で資本の状態の違いを表現した。こちらは、二重線がメーカー資本（例えば同福岡薬品）、点線が卸資本（例えば同吉村薬品）、実践がファミリー資本（例えば同宮崎温仙堂商店）、最後に外線が無い円を自立的卸とした。具体的に資本関係については研究成果 2 を参照されたい。

図 1 を見ると、医薬品業資本 3 社、卸業資本 2 社、自立的な卸が 3 社となっている。特徴的なのがファミリー資本の卸の多さである。1990 年時点では株式による支配と同族による経営の卸業が多いことになる。またそれらは、売上高の大きな九宏から小さなシンコー薬品まで売上規模に関係なく存在する。加えて、販売地域を見ると、特定地域に集中する卸も広域の卸も存在する。

次に図 2 の 2005 年のマップを見ると、1990 年には調査対象の卸業が 17 社あったが、M&A 等によって大きく数が減り 9 社となった。さらに、2004 年にクラヤ三星堂の完全子会社となったアトルのように、他地域の有力広域卸の資本参加が見られるようになった。他にも三共が資本関係を強化し 13.3%となった翔薬もある。次にファミリー資本の卸業は、これまで販売地域で見た場合に偏りが少なかったが、2005 年には鶴原吉井を除き特定地域で販売する傾向が強くなったことが読み取れる。他にも、ダイコー沖縄とス

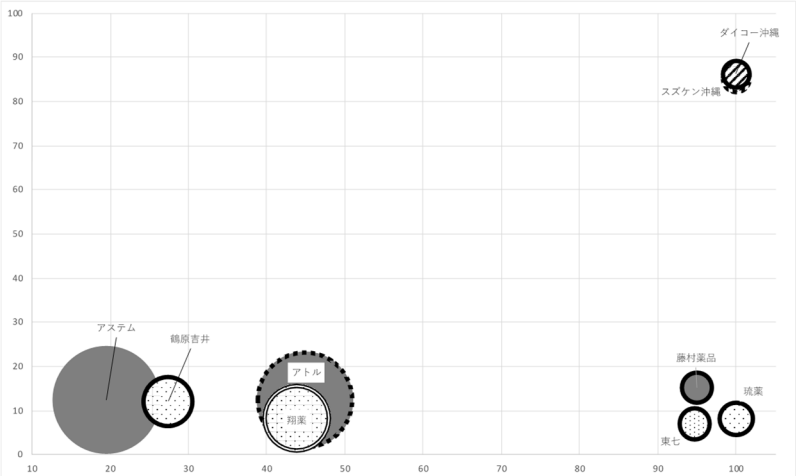

図 2:1990 年の九州地方卸の仕入先と販売地域

ズケン沖縄は資本関係に違いがあるものの、沖縄県のみ販売地域とする点、ダイコー沖縄はアステムから約 86%仕入れ、スズケン沖縄はスズケンから約 85%仕入れているといったいわゆる有力広域卸傘下と位置付けられる点も似ているという例も見られる。

以上が研究成果 2 の一部であるが、卸業も医薬品業と同じ時期に、競争力が高いグループは同族関与が終焉し、そうでないグループは維持することが確認された。また系列関係やテリトリー制を一部実証した。データ的にはわが国全体の動向を分析可能であり、今後それを実施するとともに、全体の傾向のみならずグループ間での違いを分析していく。このようなデータベースが構築できたのも今回の成果の一部である。

三つ目は、信頼に関わる文献調査及び上記二つの実証研究を経て医薬品取引における「信頼」の有無及び、あるとすればそれが医薬品業の同族関与と関係があったのかについて検討した。

一つ目の成果において、わが国の医薬品取引の仕組み変化を見てきたが、その中でも信頼という用語がいくつか出ている。例えば先行研究では、医薬品業にとって価値ある医薬品卸とは、地域特性や顧客特性を理解し、きめ細かく地域需要を掌握し、地域の医療機関から「信頼」されることで医薬品業とともに地域市場開拓を進めてくれる医薬品卸であるとする。

以上を踏まえ、医薬品を広く流通させる過程で、メーカーと卸、そして卸の医療機関、さらにはメーカーと医療機関といったように信頼関係が結ばれていた事は明らかである。このように取引慣行が機能している時は信頼が関係性維持に不可欠であり、それがなければ仕組みから淘汰されていったと推察される。そして取引慣行が改められるとメーカー、卸、医療機関それぞれが合理化を進めた結果、信頼というものが不要になったり、あるいは信頼の意味解釈が異なったりしはじめたと推察された。

若林直樹教授は『日本企業のネットワークと信頼』において後者について言及している。具体的には、「日本企業は系列取引に典型的に見られる独特の閉じた信頼関係を作り出した。共同成長を志向して、取引企業に対して組織的で人格的に信頼を作り出し、長期的で無限定的・互恵的な相互コミットメントを暗黙に了解しあった。しかし、1990 年代を通じて日本企業は、革新を志向して、能力や契約に基づく限定的な信頼を構築し、新たな協力関係のスタイルが出てきた」と述べている。この指摘はまさに医薬品の取引システムに当てはまり、同氏が指摘するように信頼の意味内容が変化したと言えるのではないだろうか。ただし、意味内容の変化は指摘できるものの、今回の研究において具体的にどのように変化したのか、さらにそれが企業統治とどのように関係したのかは明らかにすることができなかった。

一方で、それらを紐解くために意味を成すのが二つ目の成果であり、今後卸業と医薬品業の時代別変化を総論としてではなく、グループごとの関係性の変化を見ていくことでそれらを明らかにできると考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 藤野義和	４．巻 5
２．論文標題 わが国における医薬品取引の仕組みの変化	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国際・経済論集	６．最初と最後の頁 99-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤野義和	４．巻 13
２．論文標題 わが国の医薬品卸の変遷：九州地方の卸を対象とした1990年から2005年までの調査	５．発行年 2022年
３．雑誌名 信州大学経法論集	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関